



自分の中にお浄土を

7月、8月になるとスーパーなどにお盆のお供え物が並び、お盆の月として定着していることを感じます。そんなお盆も仏教というより地方色が強いものとなってしまうのですが、全国共通しているのは、「ふるさと」への帰省大移動です。

それがお盆という仏教的な行事を縁として行われているということは、私たちが仏さまともどもに、「ふるさと」から帰ってまた戻っていくという和やかな仏教国の姿です。その思いは、ご先祖から連なる仏教思想によって無意識のうちに日本人の血の中に育まれてきた、私たちの心の「ふるさと、お浄土」があることへの郷愁に動かされるからではないでしょうか。

* * *

お盆といえば、京都五山の大火文字焼きや、家庭の玄関に焚く迎え火送り火を思い浮かべる方も多いと思います。それは、亡き人に、13日の夜に迎え火を焚いて来ていただき、15日の夜には送り火を焚いて戻っていただくというのですが、その方々は「どこ」からきて「どこ」へ帰られるのか、また、帰ってこられるときは一刻でも早くと胡瓜の馬、戻っていただくときはゆっくりと茄子の牛を供え

たりもしますが、そんなに懐かしく恋しい仏さまなのに、なぜお盆の間だけなのでしょう。考えてみれば、仏事というより俗世界そのものの考えですが、孫の帰省のようで「来てよし、帰ってよし」の心情に似て微笑ましくもおかしくもあります。

浄土真宗が、慣習化したお盆のようにお勤めしないのは、まず亡き方々がお浄土で間違いなく仏さまとなっておられることがゆるぎないからです。帰省した孫達を安心して送り出すのは、帰る場所が安住の地であると信じているからでしょう。そこへ帰ってしっかり人生を送ってくれるからこそ、「よくやっているね。ありがたいことだね」と送るのでしょう。

仏さまも、安住の地「お浄土」から、常に苦悩の多い私たちが迷わず人生を歩んでくれるようにと働き続けて下さっているのです。親鸞聖人の御和讃には、「安楽浄土に至る人 五濁悪世に帰りては 釈迦牟尼仏の如くにて 利益衆生はきはもなし」と、仏さまのお仕事、お勤めが示されています。

* * *

念仏の世界は、誰もが阿弥陀仏のご本願によって必ず仏となって生まれる「お浄土」の教えです。いのち終えたら誰もが必ずそこに往く。今生かされるそのままにいつか必ず往く。それは

明日かもしれないからこそ、生かされている今、ふるさとお浄土のある意味を知り、それが仏さまの「気づいてくれよ」との願いに気づくことが大切なのです。亡き人を供養するのが仏事ではありません。浄土真宗では、尊い仏縁が「法縁」となるように勤めさせていただきます。

お浄土は、この世界で親子となり、夫婦となり、友人となり、隣人となって縁を結び、その人々と、俱（とも）にお浄土という一つの処で必ずまた出会う「俱会一処」の世界なのです。

先日、聖路加病院の日野原医師が亡くられました。いつか「新米の頃の小児病棟で、死に向かい合っている少女の、”私は死んでもいいところにいきます。先に行って待っています。だから心配しないでとお父さんお母さんに伝えて欲しいのです”という言葉に、”そんなこと言わずに、頑張りなさい”としか応えられなかったことが一番の後悔です」と語られていたことが思い出されます。

「観音勢至もろともに 慈光世界を照耀し 有縁を度してしばらくも休息あることなかりけり」（親鸞聖人ご和讃）

「お浄土」は、身近な仏さま、また私に繋がる多くのご先祖の仏さまをご縁にしてすでに私たちの前に開かれてあるのです。

合掌

奏庵法座 盆会法要

日時
7月26日(水)
午前11時～

「真宗宗歌」
阿弥陀経
住職法話
ご文章拝読
「恩徳讃」
～*～
おとき

暦の上では残暑とはいえ、暑さはこれからが本番です。日本の文化は暦に基づいており、そのほとんどが季節感と宗教の結びつきで育まれています。お盆への郷愁はその最も強いものと言えます。

家族そろってのお墓まいりや仏前での集いは、「来てあげたよ」ではなく、「いつもは忘れていてすみません。おかげさまで生かされています」と気づかされるためのものです。

どうぞお参り下さい。

お盆のお参り

首都圏では、全国各地から持ち込まれた習慣により、7月8月の両月お盆が勤められています。特に東京、横浜、横須賀の一部では7月のお盆が主流の地域が多くありますが、全国的にはやはりこれからお盆本番を迎えます。

奏庵では、あくまで浄土真宗の教えを大切にしながら、時代の変化に合わせて、習慣的なお盆期間にはとらわれず、ご依頼いただいた順に地域をまとめ、できる限りご希望に合わせてお参りさせていただいておりますので、お参りのご依頼はできるだけ早めにご連絡下さいますようお願い致します。

また、奏庵へご遺骨をお預けの方は、13日から16日のお盆期間中はいつでもお参りしていただけるようになっています。尚、期間外の奏庵へのお参り、またその際に読経をご希望される場合は、前もってその旨ご依頼下さい。

お知らせ

例年の通り8月は、「かなであん便り」「奏庵法座」ともお休みさせていただきます。

ご法事、その他の仏事は通常通りにお受けしお参りさせていただいておりますので、いつでもご連絡下さい。

下半期は9月のお彼岸、永代経法要からです。皆さまには、どうぞ酷暑の夏を乗り越えていただきますよう、またお元気なお顔が揃いますことを楽しみにしております。酷暑の毎日、どうぞ呉々もご自愛下さい。

遠雷の音と久しぶりの夕立とともに冷たい風が吹き込んでくる。それをありがたいと感じながら、水害被災地にとって、今欲しいものは何だろうと思う。乾いた砂埃を鎮める雨か、復旧作業が進んでくれる晴か、それもちょうどいい加減の…。束の間でもいいから疲れが凌げる涼しさもほしいことだろう。そのどれも思うようにはならない。■太古の昔から、自然の猛威は繰り返し繰り返しあり、あのエベレストを海底から持ち上げて造るくらいの現象とはもの凄いものであったと思うが、今のインフラや家電、家具など文明の産物もたらず被害の膨大さも凄いものがある。その地球の上でしか生きられない生物たちも、活動期に入ったとする地球の奥の莫大なエネルギーをヒタヒタと感じながらその都度順応し、生態系を変化させながら子孫をつなごうとしているだろう。その中の人間は、なんとかできるのではないかと思索する。そこが人間のもつ英知であり煩惱あるゆえだろうが、文明の被害をまた文明で補おうとするのは、賢明な備えだろうか、不安(苦)を助長させるだけではないかとも思う。■しかし、過酷な被災の度に立ち返れることがある。自然の脅威の前では、事実を正面から受け止め、謙虚になり、しかもたくましく生きようすることだ。過酷なことだが、避けられない自然の猛威は、この先も「生きる」ということへの本能を呼び覚ましてくれる。■おびただしい流木と土砂は、そこにあった人々の暮らしを根底から破壊し、変わらずあり続けると詩や歌に表現されてきた山や川を一瞬にして変えてしまう。それなのに、やはり自然は「ゆるぎ」ないものにとらえるのは、その形状ではなく、与えられる「恵み」は自然あってのこと。人間の都合よくコントロールしたとしたら、破滅に向かうと本能が知っているからだろう。■体力の消耗する酷暑に、自分だけを正しいと取り繕う刺々しい言葉を聞くのは暑苦しい。日本全体が肩の力を抜いて、木陰で昼寝する姿を見せた方が、何より優しい省エネの「涼」ではないだろうか。どうぞ無理せず大切に！ Norimaru

